

「てえへんだ！てえへんだ！」

王都ソルバークスの西郊外にある宝物管理室の建物に騒々しい声が響き渡った。宝物管理室のさほど長くはない廊下をポツシュ・ガルロンが全力疾走で走り抜ける。

「やかましいわっ！」

不意に室長室の扉が廊下に向かって開いた。ポツシュの目の前にオーク材の重厚な扉が迫る。しかし、慣性の法則に支配されたポツシュの身体は、どこかの交通標語の文言通り、急には止まらない。

ドバンツ！

ど派手な音をたてて、ポツシュは顔面から扉にぶち当たった。前につんのめるような姿勢で扉に張り付いたまま、ポツシュの身体はずると廊下に崩れ落ちた。

「今度は何の騒ぎだ？ポツシュ」

室長室から姿を現したパーシス・ボダムは、扉の向こうで朽ち果てているポツシュに向かって話しかける。ポツシュの返事はない。

「・・・死んだかな？」

扉の向こうを覗き込んだパーシスは、顔面を扉に貼り付けたまま不自然な姿勢で果てているポツシュの姿を確認すると、天井に向かって高く屹立するポツシュの尻を足先でそっとつついてみた。何の反応もない。どうやら本当に気絶しているようだった。

「かなりの勢いで走ってきていたようだな」

パーシスは足元に崩れ落ちているポツシュと、走り込んできた筈のさほど長くない廊下とを交互に見比べる。

どこにそんな勢いをつける距離があるんだろう・・・

パーシスは腕組みをしながら首を捻った。

「室長っ！」

「うわあっ！」

おもむろに立ち上がり、パーシスの目の前に出現したポツシュが叫ぶ。よく見るとその顔では鼻血が滝のようにどばばと流れ落ちている。

「大変なんですっ！」

「大変なのはお前の顔だろう」

「冗談を言っている場合じゃないんです！」

くわっと目を見開き、鼻血をどばばと流しているポツシュの顔面どアップが迫る。

「いや、冗談じゃなくてだな・・・」

パーシスの言葉をどう間違えたのか、ポツシュは傷ついたような哀しい表情を見ると、パーシスに背を向けて廊下の片隅で膝を抱えたまま座り込んだ。

「どーせあたしや、大変な顔してますよーだ」

ぶつぶつとつぶやくポツシュの背中を眺めながら、パーシスはこのまま放っておいて執務に戻ろうかと本気で思った。しかし、それではポツシュが大変だと大騒ぎしていた内容が聞けない。ソウル・イーター が強奪されてから、宝物管理室は厳重な警戒体制を敷いている。ポツシュの大騒ぎは、その警戒体制の中で何かが起きてしまったことを意味していた。

「そんなことよりも、何が大変なのだ？」

パーシスは、そこだけ異空間のように暗くなっているポツシュの背中に問いかけた。

「そんなことって、あたしの顔はそんなことレベルなんですよねえ・・・」

「まずまず落ちていくボツシユの背中が暗闇の中に溶けていくようだった。」

「面倒なヤツ・・・」

「パーシスは埒があかないことを悟り、暗黒の空間めがけて蹴りを放つ。ボツシユの背中に当たる確かな手応えがあり、ボツシユの顔が廊下の壁に激突する鈍い音が聞こえた。」

「何ばすつとですか!」

「南国の方便をわめき散らしながら、ボツシユのどアップが再度パーシスの眼前に迫る。今度は額から血を流していた。」

「いじけとる暇があつたら貴様の大変だつていう話をとつと報告せんかい!」

「パーシスもボツシユの剣幕に負けずにわめく。これが自分の部下との会話かと思うと、非常に情けなくなつてもくるが、非常体制下での報告なのだ。パーシスは自分に言い聞かせる。」

「パーシスの剣幕に我に返つたボツシユは、慌てて姿勢を正して報告をはじめた。額と鼻からダラダラと血を垂れ流しながら。」

「報告します!ボダム室長!」

「ボツシユは大きく口を開いて報告をはじめたが、パーシスはどうもボツシユの顔面を滝のように流れ落ちる血が気になつてしょうがない。顎からしたり落ちるだけでなく、大きく開けた口にも血が入り込んでいるのだ。喋りにくそうなことこの上ない。とりあえず応急処置をしてはどうかと提案しようと思ひ、ボツシユの報告を遮つた。」

「ボツシユ、待て!」

「ワン!」

「報告の前に、血まみれで凄まじいことになっているその顔をどうにかしたまえ!」

「え?」

「ボツシユは言われて初めて気づいたような表情になり、懐の中から携帯用の鏡を取り出した。」

「なつ・・・なんじゃこりゃあ・・・」

「ボツシユは低い声でうめきながら、鏡をプルプルと震わせている。」

「早く医療班に行つて治してもらえ!」

「いや、しかし・・・」

「異論を唱えるボツシユにパーシスは不安を覚える。自分の怪我を押してまで報告しなければならぬものとは何なのか?」

「報告が先なのか?」

「はい・・・実は・・・」

「深刻そうな表情を浮かべたボツシユは、まるで不吉な言葉は全て自分の中から吐き出してしまいたいといった様子で、口早に報告をはじめた。」

「昨晚、二十時頃、ヘッドペル・ゲンさんが盗まれました・・・」

「なんだと?」

「パーシスはあまり聞き慣れない名称と、嚴重な警戒態勢の下でも盗まれたという事実を驚きを隠しきれない。気がつくと、相変わらざる額と鼻から血を滝のように流しているボツシユへと詰め寄り、間近から真っ赤に染まったボツシユの顔を睨み付けていた。」

「えつと、ですから、タベヘッドペル・ゲンさんというアイテムが盗まれました・・・」

「詳しく話を聞こうじゃねえか!」

「耳慣れない声にボツシユが振り返ると、室長室の扉の向こうから白い鎧を着込んだ威丈夫が姿を現した。右手には王都でも有名な甘味屋 スウィート・リーフ の名物、チョコチップ饅頭、左手にはチョコチップ鳩饅頭が山のように盛られた大皿を抱えている。」

「ボツシユはこの白い鎧に見覚えがあった。王都を守護する騎士団、ラダロス白銀騎士団の鎧だ。しかも、胸に輝く将章の意匠からすると、師団長クラスの人物らしい。」

「リーバル殿、お騒がせして申し訳ない」

「パーシスの丁寧な言葉遣いからも、この者が位の高い騎士であることが分かる。」

「いやいや、お気遣いなく」

「リーバル・ハイランドはそう言いながら、左手に抱え込んだ大皿からチヨコチップ鳩饅頭を右手でつまみ、ひよいひよいと口の中に放り込んでいく。」

「で、何か重要な物でも盗まれてるようだが？」

「口の中で饅頭を咀嚼しながら、もごもごとリーバルが尋ねる。」

「それが、わたくしも聞いたことのない名前の物でして……」

「聞いた限りじゃ ドツベル・ゲンさん って名前らしいが、室長が名前を知らない物があるなんてことがあるのか？」

「リーバルの口調は咎めるような口調ではなかったが、パーシスは冷や汗をかきながら申し訳なさそうに答える。」

「宝物管理室には、ラムシユタインの主立った遺跡から毎日数十もの正体不明なアイテムが調査のために運び込まれておりまして、これを全て把握するとなると……」

「なるほど。そりゃあ無理な話だな」

「パーシスの恐縮具合に苦笑しながら、リーバルはなるほどなるほどとうなずいた。瞬間に左手に抱えている大皿から饅頭が減っていく。」

「んで、その ドツベル・ゲンさん っていうアイテムってなあ、どんな能力もってんだ？」

「え……ああ、魂をふたつに分けることができると言われてる鏡でして……」

「ボツシユがそう答えるとパーシスが怪訝そうな顔をして、ボツシユを見つめた。」

「ああ、なるほど。だからドツベルゲンガーになぞらえて、ドツベル・ゲンさんなのか」

「リーバルは楽しそうにわっはっはと笑うと、饅頭を喉に詰まらせてむせた。慌てて室長室の中へと引込む。」

「ちよっと待てよ。それは ドツベル・ゲンさん じゃなくて、ダーク・リフレクションじゃないのか？」

「ああ、そうとも言いますね」

「パーシスの真摯な質問に、ボツシユは軽くうなずいた。」

「何しろ、私が ドツベル・ゲンさん なんて名前つけたら、みんな大ウケしちゃって。あれ以来、みんな ゲンさん って通称でしか呼ばなくなっちゃいましたしねえ」

「ボツシユは後ろ頭をかきながら、あははーとお気楽に笑った。」

「あははじゃねえっ！」

「スパーンと素晴らしく抜けのいい音を響かせて、パーシスの平手がボツシユの頭をはたく。」

「あいたっ！」

「あれは三年前に行方知れずになってた筈だ。そのアイテムが一体どうして昨夜に盗まれたって分かるんだ？」

「パーシスがボツシユの胸ぐらをつかんで詰め寄る。」

「そうなんだよなあ。夕べの午後八時ついたら、オレもここに張ってたわけだしな。怪しげな気配があれば気づく筈なんだよ」

「リーバルが切迫した雰囲気とはかけ離れているようなのんびりした口調で再び姿を現した。右手に饅頭ではなく、カップを握っている。喉に詰まった饅頭をカップの中身で流し込んだらしい。左手には相変わらず饅頭が載っている大皿を抱え込んだままだ。」

「リーバル殿、それもそのはず。そのアイテムは今はこの宝物管理室にはないのですから」

「ここにもいもんを盗まれてもそりゃ分かるわけねえや」

「パーシスに睨み付けられたボツシユは、ダーク・リフレクション が盗まれた経緯を、行方不明になった当時の事情から、洪々と話し始めた。」